

石原 幹太 (いしはら かんた)
 日本大学 理工学部 海洋建築工学科



「過去と未来が共存する」と唱われる街、月島。

下町の風情を醸し出している古びた長屋たちは防災の観点から早急な戸別建替えか再開発が求められているが、そのどちらの方法もかつての下町らしさを持った路地空間を喪失してしまう。月島の路地空間は住民の生活が溢れ出すことによって、地域のあたたかみを創出している。本計画では集合住宅の住戸ひとつひとつに形態を変化する余地を残し、コーポラティブハウスのように居住予定者の希望によって住空間に変化の可能性を持たせる。また住戸間に共有庭を設けることで、月島の路地空間の様に、共有空間に生活物が溢れ出るように計画する。たとえ住宅は姿を変えたとしても月島らしさを失わない高層集合住宅となる。

月島がアイデンティティーを失わないように、下町らしさを含んだ複合集合住宅を計画することでこれからの月島の住まいのあり方を提案する。

講評

既存の住宅群は耐用年数を越えたとし、「再開発」による集合住宅案が示された。実社会にみられる共同住宅とは異なる、本作の空間的指向性は次の二点。①各住戸の専有面積を確保しつつ、あえて床面積を小さくし、増築を推奨。②共同住宅の必須機能としての共有部分面積を必要最小限に削り、反面、地域コミュニティの場としての集会機能部分を設ける。これらの空間操作手法には、実社会に対するふたつの挑戦が内包されている。ひとつは、既存不適格建築物に対する法規範の無効化、もうひとつは、これまで不動産市場を意味づけてきた空間所有に対する経済的価値の再定義である。しかし、このふたつの戦略は、じつは、既存の月島の町並みそのものに従前から備わっていた地域的性格でもある。そこに作者なりの「路地」の空間解釈が付加され、本計画が形となった。したがって本作は、新しい路地の形を提示したように見せかけているが、その奥に潜むのは、月島界隈に存する法規範と区分所有の現状に対する称賛の表明なのだ。これは間違いなく、知能犯による「再開発」である。(審査委員：矢野 裕之)